

## うなぎの首飾り？

原 野 昇

昭和61年度共通第一次学力試験のフランス語の追試験問題に、中世の傑作『狐物語』からの一節が出題されていた。もちろん現代フランス語に、それも子供用に分かりやすく書き直したものである。それは「狐と荷車引き」の話で、マルタン版<sup>1)</sup>で言えば第3枝篇の一部にあたり、よく知られた話である。

腹をすかした狐のルナルが、向こうから魚をいっぱい積んだ荷車が二人の男に引かれてやって来るのを見て、一計を案じる。道のまんなかに出て寝ころび、死んだふりをするのである。やって来た荷車引きたちは狐を見つけ、てっきり死んでいるものと思い、その皮を市場で売ったら儲かると胸算用し<sup>2)</sup>、狐を荷車に積む。車に乗せられたルナルはそこにあった魚籠のニシンを腹いっぱい失敬した。さらに腹をすかせて家で待っている妻や子供たちにも持って帰ってやろうと、別の籠からうなぎを取り出しそれを首の周りにくくり、車から飛び降り、そして「御馳走さま、あばよ」と言って逃げる。荷車引きたちはくやしがるが後の祭。

以上が話の大筋である。このなかで、ルナルが妻子たちに土産としてうなぎをもって帰る場面は試験問題では省略されている。しかしこの共通一次の試験問題を機会に『狐物語』の該当箇所を読んだ人から、そこに出てくるこの「うなぎの首飾り」collier d'anguilles とは何か、という問が筆者のもとに寄せられた。狐のルナルが魚（この場合うなぎ）を、持って帰るのに便利なように首にかけたのは分かるとして、いったいうなぎがどのような状態になっているのを想像したらよいのかというわけである。

フランス文学でうなぎの話と言えばすぐに思い浮かぶのが、中平 解著『鰻

のなかのフランス』(1983年、青土社)である。同書はうなぎの生態、稚魚、その呼び名、捕り方、食べ方など、うなぎに関することは何でも扱われている、と言え少し大げさかも知れないが、少なくとも著者はうなぎに関することなら何でも興味と関心をお持ちなのではないかと思わせるような本である。フランスのみならずドイツ、スペイン、オランダのレストランや日本のある地方(著者の御郷里の四国)のうなぎの捕り方なども出てくるが、何と言っても著者の得意とされる場所はフランス文学であろう。それは同じ著者による『フランス文学にあらわれた動植物の研究』(1981年、白水社)で存分に発揮されたあの方法である。すなわち、フランスの文学作品を広く丁寧に調べ、該当箇所を一枚一枚カードに取っていかれるのである。しかし『鰻のなかのフランス』の場合は書名からも分かるように(『フランス文学にあらわれた鰻』とはなっていない)、前書とは異なりあくまでもうなぎに焦点があてられている<sup>3)</sup>。とは言え著者の主要な関心がフランス文学にあることは間違いないであろう。ただ残念ながら『狐物語』のこの箇所は同書では扱われていない<sup>4)</sup>。

さきの質問にかえると、「うなぎの首飾り」とはどんな「首飾り」であろうか。うなぎを直接首に巻きつけたのであろうか。レオポル・シュールドルはこのように解釈して次のように説明している。「彼はうなぎのいっぱい入った2番目の籠を開け、うなぎを自分の首に巻きつけました。そしてそのうなぎの首環をつけてそっと飛び降りました<sup>5)</sup>。」しかしシュールドルのこの考えは後にアントワヌ・トマによって否定されている<sup>6)</sup>。

またソーセージやハムをひもで縦につないだものをフランスの豚肉屋で見ることがあるが、あれと同じようにうなぎの頭の部分と尾の部分とをつないで環にしたものであろうか。その場合にはあのぬるぬるとしたうなぎをどうやってつなぐのか。まさかうなぎの尾そのものをひも代わりにして結ぶわけではなからうが、ひもを用いて結ぶにしても、尾の部分は言うにおよばず頭の部分にしてもちょっとやそっとで結べるはずはなからう。

筆者が子供の頃魚釣りに行ったときには、釣った魚は近くの笹やぶから適当な笹を折ってきてその笹の茎を魚のえらから突き刺し口から出して通した。先端には笹の葉が広がっているのでそれほど大きくない魚なら落ちる心配はない。こうして何匹かの魚を一本の笹の枝に通して持って帰ったのであるが、うなぎは捕った経験がないし、うなぎでもえらから口に笹の茎のようなものを突き通

すことができるのかどうか知らない。

それよりも日本で何匹かの魚と一緒にすると言えば、すぐに思い浮かべるのが「めざし」であろう。「めざし」と言えば干したある種の魚（たいていの場合いわし）のことを指す場合が多いが、その名の由来は読んで字のごとく目刺し、すなわち竹やわらで目の部分を刺し通した状態の魚から来ているということは言うまでもない。『狐物語』のうなぎの場合もこのような状態の「うなぎの首飾り」なのであろうか。それにしてもうなぎの場合は至難の技ではなからうか、となおも疑問が残る。ただし先の尖った金属の串か棒でいったん串刺しにし、その後で首にかけるのに便利なようにひもを通したのなら何とか理解できるわけである。実は「首飾り」ではなく、「串刺し」にして持って帰った、としている現代語のテキストもある。例えばルロワ＝アレのテキストでは次のようになっている。

隣の籠にはウナギやツメウナギがはいっていました。ルナルは一番うまそうなのをたくさん選びました。だがどうやって持って帰ったらいいでしょう。

そこは知恵のはたらくルナルです。魚を串刺しにするのにちょうどいいやすが片隅にあるを見つけました。彼はそのうちの手頃なのを取り、うなぎの頭をそれに通しました。<sup>7)</sup>

このテキストは実はバンジャマン・ラビエによる挿絵で有名であり、1905年に初版が刊行されたものであるが、描かれている動物たちの目つきや顔の表情が実に豊かで、見ていて楽しいその挿絵を再現するために、1983年に復刻版が出版された。筆者が参照したのはこの復刻版の方である。これは縦31×横24.2センチメートルの大型本で、全168ページ中に大小305点もの挿絵がちりばめられている。その20, 21, 22ページの3回にわたり、先が細く尖って釣り針のあぶ（またはあぐ）に相当するかえり（逆刺）が一方向についている金属の棒（やす）らしきものに串刺しにした4匹のうなぎを狐が背中にかついでいる絵が描かれている。

またポーラン・パリスのテキストでは次のようになっている。

どうしたらいいでしょう。ルナルは魚を串刺しにするのに使う先の尖った柳の

枝の束が荷車の中にあるのを見つけました。彼はそれを2・3本取り、うなぎの頭に通し、次いでそれをぐるぐると自分の体に回し、三重巻きのベルトにし両端を編んで結びました<sup>8)</sup>。

ここでは魚を串刺しにするための道具が柳の枝でできているとはっきり書いてあり、それを環状にして身につけるのであるが、首とは書いてなくベルトとあるのでおそらく腰につけたのであろう。なるほど柳の枝なら、先端を尖らせて突き刺すのにも使え、また曲げて環状にすることもできるのであろう。死んだうなぎならそう難しいことでもないかも知れない。

さらにレオポル・ショーヴォーのテキストでは、同じく柳の枝ではあるがその用途や身につける場所が違っている。

次いで彼は一番おいしそうなのを二匹選び、それを首環に付けました。その首環は荷車の中で見つけた柳の小枝の束から何本か抜き取って彼が作ったものでした<sup>9)</sup>。

ここでは柳の小枝が串刺し用ではなく首環を作るために用いられている。ただしこの首環はうなぎをくくるためにわざわざ作ったものか、単なる普通の首環なのかははっきりしない。また肝腎の、どのようにしてうなぎを柳の小枝の首環に固定したのかが分からない。

ジャック・オーモンのテキストでは次のようになっている。

彼はもう一つの籠にとりかかりました。そこに鼻面を突っ込み、中からうなぎを引っ張り出しました。うなぎの首環を二つ取り、うまい具合にその中に頭と首を通し、そしてそれを背中の方にまわしました<sup>10)</sup>。

先のショーヴォーのテキストとこのオーモンのテキストに *collier(s)* 「首環(首飾り)」という語が用いられている。前者のは柳の小枝でできておりルナールが作ったものであるが、後者のは「うなぎの首環」 *colliers d'anguilles* である。また前者では一つの首環に二匹のうなぎをつけたが、後者では二つの首環であり複数のうなぎである。しかし後者の首環はルナールが作ったとは書いてないので、取り出したうなぎでルナールが「うなぎの首環」を作ったのか、

それとも最初から「うなぎの首環」状で籠の中に入っていたのか分からない。ただし、どちらかというと後者と思われる。

以上はすべて現代語のテキストである。それは中世の『狐物語』のテキストを現代語に忠実に訳したのではなく、現代の読者にも分かるように新しく書き直したものである。ただし、子供向けの大胆な書き直しから翻訳に近いものまで、いわば「原文への忠実度」は千差万別である。これらの著者（訳者と言わずあえて著者とする）たちは本来、現代の読者に分からせるように書いているはずである。その点ルロワ＝アレヤポーラン・パリはその場の状況がありありと目に浮かぶように書いているが、ショーヴォーやオーモンのテキストは少し説明不足の感を免れない。それは筆者のフランス語読解力の不足も一因であろうが、著者たちが原文に引かれすぎたのではないかと思われるふしもある。

それでは原文はどうなっているのであろうか。(1)マルタン版、(2)ロック版、(3)ガンマ (r) 版のテキストを順番に挙げておく。そして2つの対訳版、(4)デュフルネおよびメリヌ版と、(5)コンバリュール・デュ・グレスおよびシュブルナ版の現代語訳も挙げておく。(4)と(5)の原文の方はいずれも(1)とおなじ写本に基づいており、この個所では(1)とほとんど差がないので省略する。

(1) L'autre panier a assailli.

Son groing i mist, n'a pas failli,  
Qu'il en traist trois res d'anguilles.  
Renars qui sot de maintes guilles,  
Son col et sa teste passe oultre  
Les hardillons, puis les acoutre  
Dessus son dos que tout s'en cueuvre<sup>m</sup>.

(2) L'autre panier a assailli,

Son groing i mist, n'a pas failli,  
que il en traist fors des anguilles.  
Renart, qui sot de tantes guilles  
Son col et sa teste passe oultre,

les .II. hardailles bien encoutre  
desor son dous, que tot s'en cuevre<sup>12</sup> .

- (3) L'autre panier a assailli,  
Son groing i mist, n'a pas failli  
Qu'il n'en traisist fors des anguilles.  
Renart qui sot de tantes guiles,  
.III. hardiaus mist entor son col.  
De ce ne fist il pas que fol:  
Son col et sa teste passe outre,  
Les hardeillons mout bien acoutre  
Desor son dos que bien s'en covre<sup>13</sup> .

- (4) Il a attaqué l'autre panier  
où il a plongé le museau. Succès total:  
il en a retiré trois chapelets d'anguilles.  
Renart, qui n'est jamais à court d'idées,  
les enfila autour de son cou et de sa tête,  
puis il les arrangea sur son dos  
qui en est tout recouvert<sup>14</sup> .

- (5) Il s'attaque en effet à un autre panier, et, y plongeant le  
museau, en extrait trois chapelets d'anguilles. Et comme  
il avait plus d'un tour dans son sac, il passe la tête et  
le cou au travers puis les arrange de manière à les  
rejeter sur son dos<sup>15</sup> ;

(1), (2), (3)はそれぞれA写本, B写本, C写本を底本とした校訂本である。A写本が最も古く, 次いでB写本, C写本の順である。(1), (2), (3)を比較してみると, 用いられている単語や表現が少しずつ異なっていたり, (3)には(1), (2)にはない行(5行目と6行目)が新たに加わっているなど, それぞれの写本の特徴が見られるが, 詳細な検討は, 上記以外の写本との照合も含め, 紙数の都合上割愛し, この個所には写本間で大きく異同がある, ということだけを指摘するにとどめておく。ここで最も重要な点は(1)にあった *res* という語(3行目)が(2)と(3)にはないということである。

実はこの語が問題なのである。(1)の底本A写本を親本(元の手本)として写した写字生(それは(2)の底本のB写本の写字生かも知れないし, B写本以前の写字生かも知れない)は, A写本の *res* という語を故意に避けたということが大いに考えられるからである。それは自分が写している写本の読み手にとってこの語は理解し難いのではないかという配慮からかも知れないし, 場合によってはその写字生自身が理解できなかったからかも知れない。アントワーヌ・トマは, この語はラテン語の *RESTIS* 「ひも」に由来し, にんにくやたまねぎのしっぽの部分(実の部分の頭を考えて)を表わすとし, イタリア語, スペイン語, ポルトガル語, プロヴァンサル語にも対応する語があり, それらはすべて, いくつかのにんにくやたまねぎを集めてしっぽの部分の束ねたものを表わしている, と指摘している。そして『狐物語』のこの個所では, ひも *hardillon*<sup>16</sup> に頭の部分をさし通されたうなぎが, ちょうど鍵束のように首環の形になっているのを想像すればよいとしている<sup>17</sup>。にんにくやたまねぎの束からの類推でゆくと, 魚の場合も頭ではなくむしろ尾の部分をまとめて結んだものの方がイメージがより近いと思うが, うなぎの場合には上にも述べたように尾の部分を結ぶのは難しいと思われるので, 頭の部分にひもをさし通した状態としたのであろう。また先に引用した, (4)と, おそらく(5)も, トマのこの指摘を参考にして現代語に訳したものである<sup>18</sup>。そこで用いられている *chapelet* という語は数珠のようなものを指すが, その場合には環のすべての部分すなわち全体に珠(この場合うなぎ)が連なっているのを連想する。しかしトマの言う鍵束の場合には鍵(うなぎ)が一個所に集まっており, 残りの部分はひもなどが露呈していると思われ, またその方がにんにくなどの束との連想も近いであろう。そしてルナールがその環に顔や頭を突っ込み, うなぎを背中にまわしたという(1), (2),

(3)のテキストの各後半部分ともびったり合うであろう。もちろんchapeletにも必ずしも環全体に珠が連なっていないなくてもよいかも知れないが、一定の間隔をあけて次々に連なっている様子と、玉ねぎや鍵が束になっている様子とは少しイメージにずれがあるように思える。

いずれにせよこれはルナールが作ったものではなく、このような状態でうなぎが籠の中に入っていたのである。そしてにしんの方にはそのような描写がないので、もしかしたら当時うなぎだけがそのような束にして売買されていたのかも知れない<sup>19</sup>。

これで冒頭の質問に対する一応の解答が出たかも知れない。しかし専門の研究者の注釈をただそんなものかと軽く読み流していた筆者にとって、このような質問を受け、『狐物語』の写本、校訂本、現代語訳、現代語による書き直しを調べ直し、写本の一つの語の取り扱いをめぐるさまざまな問題が派生してきているということに、改めて驚かされたしだいである。

#### 註

- 1) Ernest MARTIN, *Le Roman de Renart*, t. I, Strasbourg, 1882.
- 2) フロベールの「聖ジュリアン伝」の中に次のような一節がある。「いつも狐の皮衣（かわごろも）を着て、領主は城の中を回って歩き、家来の間の裁きをつけたり、近隣の家の争いを円く納めた。」（山田九朗訳『三つの物語』〔岩波文庫〕pp. 80-81, ただし仮名遣いは改めてある。）
- 3) ただし同書中にはうなぎの話以外の文章も収録されている。
- 4) なお同書中でしばしば引用されている、松井 魁著『うなぎの本』（1971年、丸の内出版：1977年、柴田書店＝前書を加筆・修正したもの）の中にもうなぎに関する文芸の項目があるが、フランスの『狐物語』は扱われていない。
- 5) Léopold SUDRE, *Les sources du Roman de Renart*, Paris, 1892; réimprimé, Genève, 1974, p.170.
- 6) Antoine THOMAS, *Essais de philologie française*, Paris, 1897, p.379.  
この書物は日本では見つからず、1985年に渡仏した際パリの国立図書館で必要箇所



を筆写したが、ちょうどその頃在仏中の、本学にも1984年に集中講義に来て頂いた慶応大学の松原秀一先生に、本学のフランス人教師ジャリ先生が卒業された高等師範学校の図書館に案内して頂き、館長のプティマンジャン氏（ジャリ先生のお知り合い）を紹介され、書庫内を見学させて頂いた。その際にも本書を見せて頂いたが、筆者の帰国後松原先生が本書の大部分の論文をコピーして送って下さった。この場を利用して感謝申し上げる。

- 7) 以下現代フランス語のテキストにも大いに問題があり、本来ならばフランス文の方も（あるいはフランス文だけを）引用すべきであるが、紙数の都合上と本誌の編集方針（もっぱら経済上の理由から欧文をできるだけ避け、やむをえない場合にはできるだけ一個所にまとめる）からだけでなく、後に述べるように、現代フランス語に書き直したテキストで問題の箇所は古フランス語の原文に影響されたのではないかと思われるので（註16参照）ここでは割愛させて頂く。ただし出典をページ数とともにあげておくので関心のおありの方は直接御参照いただきたい。文献がお近くにない方は、筆者までお申し込みくださればコピーをお送りいたします。

*Le Roman du Renard*, adaptation de J. LEROY-ALLAIS, illustrations de Benjamin RABIER, Paris, 1983, p.20.

- 8) *Le Roman de Renart*, texte de Paulin PARIS, Edition établie par Jacques HAUMONT, Paris, 1966, p.59.
- 9) *Le Roman de Renard*, version moderne par Léopold CHAUVEAU, Paris, 1924, p.40.
- 10) *Le Roman de Renart*, transcrit par Jacques HAUMONT, Paris, 1966, p.79.
- 11) E. MARTIN, *op. cit.*, p.134, vv.93-99.
- 12) Mario ROQUES, *Le Roman de Renart*, Paris(CFMA, 88), 1960, p.4, vv.13027-33.
- 13) Naoyuki FUKUMOTO, Noboru HARANO & Satoru SUZUKI, *Le Roman de Renart*, édité d'après les manuscrits C et M, t.I, Tokyo, 1983, p.27, vv.805-813.

なおメオン版はこの箇所ではガンマ版と大差ないのでテキストは省略し、該当箇所のみを指摘しておく。

M. Dominique-Martin MEON, *Le Roman du Renart*, t.I, Paris, 1826, p.32,

vv.843-851.

- 14) *Le Roman de Renart*, texte établi et traduit par Jean DUFURNET et Andrée MELINE, t.I, Paris, 1985, p.285, vv.93-99.
- 15) *Le Roman de Renart*, édition bilingue, traduction de Micheline de COMBARIEU DU GRES et Jean SUBRENAT, t.I, Paris, p.53.
- 16) この語がルロワ=アレ (=註7) やポーラン・パリシ (=註8) のテキストでは、そのまま *ardillon* として用いられているが、現代語の *ardillon* には「ひも、縄」と言う意味はない。
- 17) A. THOMAS, *op. cit.*, pp.370-380.  
なお『狐物語』の言語に関する詳細な研究を行ったティランデルの諸研究には、この語についての言及がない。
- 18) J. DUFURNET & A. MELINE, *op. cit.*, p. 284.
- 19) この第3枝篇よりも後に作られた第9枝篇のなかで、ルナールが今まで自分のやったことの手柄話をするところがあるが、そこにこのエピソードへの言及がある。そこでは *deus hardelees* (マルタン版, 53行) となっており、デュフルネとメリーヌはこれを *deux colliers (d'anguilles)* と訳している (前掲書, t. II, p.107) が、ここでも *res* という語はもはや用いられていない。